

個から全体を考える山のトイレ問題

横須賀邦子（山のトイレを考える会）

会では2001年、2002年と大雪山・十勝連峰のトイレマップを作成し、その更新をしてきました。マップの更新された内容をみると道内登山口にあるトイレの状況は、少しずつですが改善されて来ていると実感します。地元山岳会・地元役場・関係部署の改善しようという動きが功を奏していると感じられ、新設されたり改良された登山口トイレの利用を促し、登山前に用を足すことで山の汚染を防ぐことに効果があるでしょう。

会発足当初、個人が取り組めるものとして携帯トイレをクローズアップし使用を促しました。次年度には全道各地から寄せられるトイレ問題の解決の多様さについて、皆様から様々なご意見を頂戴し課題整理に集中致しました。しかし2002年の活動については、携帯トイレの推進を足踏みしていた状況があるといえます。携帯トイレを利用した山トイレ問題解決は試行の範囲をどこまでにするか、積極的に推進することに躊躇しました。

これまで調査したアンケートに見る限り、個人で取り組める自然保護として携帯トイレは支持されていました。しかし実情は、山行の都度携帯トイレを使用する人は一部の人に限られ、普及が遅れていることを示しています。

意識と実行の取り組みの違い

- 携帯トイレを使用し保護をしたいとする意識と、ザックに入れて持ち歩いているが使用できていない状態がある。

普及しない物理的理由

1. 使用済み携帯トイレ回収ボックスの設置が少ない
2. 回収ボックスの位置が分かりづらい
3. 使用時のブースの設置が不足している
4. 廃棄する際の不燃ゴミと燃えるゴミに分ける不潔さ

以上から心情的に自然保護に貢献したい気持ちがうかがえても、しかし登山中の使用になると足踏み状態がある事実も分かるでしょう。上記のように改良すべき点がこれまでの調査で分かっています。また同時に地域性の問題が大きいことも考えられます。山岳地の環境維持に登山者の多くが積極的な思いを持っていても、どの地域でも同じ条件で携帯トイレを使用するには、まだ改善すべき点が多々あることが分かりました。当然、携帯トイレ普及の取り組みを積極的に継続することも必要ですが、

実用的な回収システム

使用者の途中廃棄しないマナー向上

回収地点の広報

廃棄物として燃えるゴミにできないか

など検討していきたい項目も多々あります。

トイレ問題を考えて 3 年を経ようとしています。原始的な景観維持を希望して山上に何も作ってはならないと考える方や、登山のスピードアップに伴って便利な登山をイメージする人など、利用者の希望は沢山あります。どれをとっても一つの山に一つの答えではありません。

オーバーユースの言葉を耳にしますが、三人三様で●●名以上は利用のしすぎと断定できませんし、その概念もまだ整理されていません。同じ様に、どこにでもトイレの新設は望みませんが、利用の影で汚染は進みます。便利で快適なことのために景観を変えることは極力避けたいのが本筋ですが、高山植物の中に続くトイレ道を見ると、何らかの手立てが必要で、何を基準に考えれば整理できるのか思案しています。

必要な措置は入山規制なのか、更に有料トイレなども視野に入れて考えることになると、個々の山で地域別の対応となってしまいます。山脈全体から見てまとまりの無い状況を生んでしまうことが想像されます。一つ一つの山を取り上げて、そのたびに対処の方法を探ることをずっと試みてきましたが、今までの考え方では限界も感じていました。もっと別の観点から考える方法がないとバラバラな対応になってしまい、全体のまとまりある景観とはならないことが予想されました。

そこで全体の利用のあり方を考え整理してから、個々の状況を整理する。言わば今までは逆の順番で考えようとしているのが、今日ご紹介する整備の方法の一つです。誤解を与えずにおきたいことは「整備＝人工的な設置に直結するものではない」ということです。利用のあり方を整理し、解決の指標として考える方法といえるもので、是非ご意見をいただきたい部分でもあります。

更に会では、皆様から頂いたご意見や会ミーティングで話し合ったことを、もっと具体的な行動に発展させるため、昨年 11 月北海道へ要望という形で提出致しました。この要望書は、これから取り組みたい方向、会の活動を事業として推進するための準備と、要望として整理できた問題に利用者が参加し意見を述べる機会をもつこと、地元との連携についてヒアリング等の形で各地の山岳会や関係団体と意見調整することなどに主な目的を置いていきます。全体の趣旨は会の考えを行政に伝え、今後の意見交換において基盤となるようにしたいとするものです。

私ども登山者が親しむ山岳地は、環境省・林野庁・北海道・地元市町村で管理され成り立っています。関係機関の多さは登山者にとって疎い部分ではありますが、ひとつひとつのテーマに沿って改良する為には今後も多くの具体的な話し合いが必要となるでしょう。

要望書

山岳トイレ対策における携帯トイレ無償配布の継続と、貯留式トイレの影響に関する実態調査実施について

北海道の山岳地では、希少な動植物の生息地である高山帯の登山道や避難小屋、野営地の周辺に、登山者が放置した尿尿や紙が散乱しております。長期的には水質や植物の生息環境への影響が、短期的には山岳景観や植物の踏みつけ等への影響が懸念されます。当会は2000年より、市民団体として、一般登山者への啓蒙活動、行政との意見交換、関係者を集めたフォーラムの開催などを行ってきました。

北海道におかれましても、避難小屋の尿尿のくみ取り、登山口へのバイオトイレの設置調査、携帯トイレの普及と対策を進めており、非常に心強いことだと認識しています。しかし、大雪山南沼野営地や美瑛富士避難小屋といった利用が集中する宿泊地にトイレの設置が実現していないこと、高所で寒冷な気候の高山帯で有効な処理方法が見いだせないこと、携帯トイレの配布と回収が整っていない段階での普及は不十分ではないかといった疑問もいただいております。

以上の観点から、今後の山岳トイレ問題解決に向けた一層の協働のために、次の事項を要望し、そのご返答を御願ひするものです。

1. 上ホロカメットク避難小屋トイレくみ取り、携帯トイレの配布・回収、登山口バイオトイレ設置等の今年度の諸対策の実施状況および結果の評価を公表すること。
2. 大雪山等の山中のトイレには、ゴミが多く混入するなど、マナーの悪い使用が行われています。これらのトイレに、山岳トイレの問題点の情報、ゴミを入れないこと、使用済みの紙の持ち帰りの協力を求めることなどを呼びかける看板の設置を行うこと。
3. 当初、3年間と予定されていた携帯トイレの無償配布・回収を、あと5年間継続すること。
4. 山岳地に放置された尿尿や紙、および浸透貯留式のトイレが、高山帯の自然環境（土壌、水質、植生など）に及ぼす影響に関する調査を実施すること。
5. 貯留式やバイオトイレなど、高山帯での様々なトイレ方式について、周辺環境への影響やコスト、メンテナンス等の面から、北海道の山岳地への適応可能性について、総合的に評価する調査を実施すること。
6. 山岳地におけるオーバーユースの評価および施設整備の基礎的情報である登山者数の把握について、その実施体制および方法についての調査研究を実施すること。
7. 山岳トイレ対策の実施にあたって、関係機関他、当会をはじめとした市民や登山団体の意見を聴取する機会を設け、相互の意見交換に努めていただきたいこと。

※各要望事項に関する説明、参考資料を別紙に添付いたします。

以上。

(なお、本要望書の御回答は文書で11月末日までに御願ひします。)

北海道からの回答書

記

1 14年度対策実施状況結果の公表について

今年度の実施状況については、現在とりまとめ中ですので、まとも次第、公表する予定です。

2 看板の設置について

今年度はヒサゴ沼避難小屋と併設トイレに「ゴミ持ち帰り」の呼びかけ看板を設置しました。今後、他のトイレについても看板を設置したいと考えています。

3 携帯トイレについて

無償配布については、来年度も継続する予定ですが、今後は、利用者自ら購入して使用していただけるよう、より一層の普及に努めるとともに、ブースや回収ボックス等の設置などについて関係機関と検討します。

4 既存トイレの環境への影響調査について

各種の調査や評価方法等がございますので、今後の検討課題として関係機関とも協議していきたいと考えています。

5 北海道に適したトイレ方式の調査研究について

現在、登山口においてオガクズによるバイオトイレの有効性を検証しておりますが、来年度も、引き続き調査します。

6 登山者数の把握について

道としても必要なことと考えておりますので、今後、関係機関とも協議しながら、その調査手法等について検討します。

7 意見交換の機会の設置について

貴会が開催しておりますフォーラムに参加させていただくなど、各種機会を活用し、意見交換をしてまいりたいと考えています。